

要旨

【研究目的】 A町のホームヘルパーと一緒に“災害時アセスメントツール”を作成した過程における、保健師とホームヘルパーの協働のプロセスを記述することで、協働の具体的な方法とアウトカムを明らかにし、協働のあり方や他職種との効果的な協働に向けた具体的な示唆を得ることを目的とした。

《研究方法》質的探索的研究。研究協力者はA町社会福祉協議会の常勤ホームヘルパー3名。ツール作成過程と、作成後にプロセス全体を振り返り行った半構成的インタビューを用いて収集したデータと、フィールドノートのデータをもとに、協働の促進要因となったと思われる保健師の関わりといった「方法」と、協働の結果得られた成果や効果といった「アウトカム」について語られた部分に着目して、内容分析を行った。

【結果】

1. 保健師が用いていた「方法」は、意識していた目的別に以下のように6つに分けられた。
 - 1) 保健師を理解してもらう：方法〔1対1で話す〕〔自分のありのままを素直に表現する〕〔ヘルパーとの活動に対する熱意を言葉に出して伝える〕〔保健師活動をアピールする〕
 - 2) ホームヘルパーを理解する：方法〔ヘルパーとの関わりに常に学びの姿勢で臨む〕〔自分自身をアセスメントし、変革する〕〔ヘルパーを知る機会を自ら動いて作る〕〔A町の住民や地域資源から学ぶ〕
 - 3) ホームヘルパーを理解する、特に仲間としての連帯感を生み出す：方法〔ヘルパーと共通の目的・目標を持つ〕〔ヘルパーの体験を共有する〕〔ヘルパーと場を共有し、一緒に考える〕〔お互いの悩みや理想を共有する〕
 - 4) ホームヘルパーの力を引き出す：方法〔ヘルパーの気づきや思いがうずもれないように、共感しながら引き出す〕〔ヘルパーと場を共有し、一緒に考える〕〔ヘルパーの力を信頼し、意見を大事にする〕〔見出したヘルパーの専門性を伝え、ポジティブフィードバックを返す〕
 - 5) お互いの力を引き出す：方法〔ヘルパーや取り巻く状況に合わせて、保健師がアプローチ方法を変化させる〕〔保健師とヘルパー、異なる職種が協働するという特徴を最大限生かそうとする〕〔今まで得てきた知識と経験を総動員して、真剣に語り合う〕〔グループミーティングの環境作りを行う〕
 - 6) 活動の先を見据え、次の協働機会を作る：方法〔成果を目に見える形にして残そうとする〕〔関係職種をまきこむ〕〔保健師活動をアピールする〕
2. プロセスの初めから最後まで『保健師を理解してもらう』『お互いの力を引き出す』『活動の先を見据え次の協働機会を作る』目的の「方法」が使われていた。初期段階では保健師とヘルパーの相互理解を目的とした「方法」、終結段階ではお互いの力を引き出すことを目的とした「方法」を多く用いていた。
3. 「アウトカム」は【他職種とは違う、自分の職種の強み・専門性について明確になった】【目に見える成果物ができて、日々の実践から意見を出し合い時間をかけて仕上げる意義を、さらに実感した】【一つの協働という形を知り、同職種間の協働の見直しにもつながった】【他職種について理解が深まり、これからも、もっと協働していきたいと感じた】【保健師とヘルパーの新たな協働の可能性を見出すことができたようになった】だった。

【結論】 協働は、対人関係とその状況をアセスメントし続けることが必要で、常に変化し発展していくプロセスであると考えられた。まずはお互いについての理解を深めるところから協働が始まることが示唆され、相互理解は協働の「方法」であり「アウトカム」でもあった。変化していくプロセスの中でも、保健師を理解してもらう、お互いの力を引き出す、活動の先を見据え次の協働機会を作るといった目的を、協働の初期から意識することの重要性が示唆された。効果的な協働となるために、保健師には自ら歩み寄り協働の機会を作ること、専門職同士の協働自体が地域の社会資源となっていくようにつながりを作ることが求められている。